

【寒苦鳥（かんくちよう）】

想像上の鳥・寒苦鳥のお話です。

「ヒマラヤの中腹に気候の良い地域があった。そこに住む鳥は、花を求めてその香に酔い、木陰に休んで木の實を食べ、一日中遊びにふけた。

ところが、日が西に沈み、やがて山上から肌をさすような冷たい風が吹いてくると、帰り住む巣を作っていないかったことに気づき、「夜が明けたら巣を造ろう」と、悲しげに鳴いたという。

しかし、朝がきて明るい日ざしにつまれるころになると、もう夜の寒さに悲しんだことも忘れて、一日を遊び暮らし、日暮れとともにまた、寒さの中で鳴かねばならなかった」と、『仏教の学習・こころ』に紹介されています。



本堂前の手水鉢 善教寺「石」シリーズ その2

夜には「夜が明けたら巣を造ろう」と鳴き、昼には「無常の身だから巣など必要ない」と鳴くこの寒苦鳥を、仏教では、人間のなまけ心、仏道を求めない心に喩えています。

【観察（かんさつ）】

観察は、物事をくわしく見て調べること、物事のありのままの現象を、客観的に注意深く見きわめることを意味する日常語です。

仏教では「かんざつ」と読み、知恵によって対象を正しく見きわめることを意味します。

お釈迦さまは、自分を含めた世界を観察思惟し、そのあるべき姿を説かれたといわれています。

善導大師の『観経疏』には、五種の正行が説かれています。その中に「観察正行」があります。一心にもつばら浄土の阿弥陀仏や、その浄土のありさまに心をそいで、それを観察し、つねに思うことと説明されています。

その他にも、観察時衆、観察得失など、観察という語は仏典に多く出てきます。

観察は知恵によって行うものですから、物事を見るときには、私情や主観をまじえないで、あるがままに、観察してもらいたいものです。

（辻本敬順氏「仏教用語豆辞典」参照）

住職レター

先月二月十一日、善教寺護持会総会を開催しました。毎年二月十一日に開催されるようになったのは、いつ頃からでしょうか。私が子供の頃には、もう既に二月十一日開催だったように記憶しております。

毎年開催するこの総会は、先々代住職である祖父が始めました。私が十九年前に継職してから、この総会が、門信徒の皆さまとの良き縁になっております。住職に就任した当初からの変化は、女性の参加者が増えたことと、総会後の懇親会で酒の量が減ったこと。『ござねぶり』と云われる、いつまでも酒を飲み続けられる方が減りました。これも時代の流れでしょう。

総会ご参加の皆さま、また来年も、ご参加お待ちしております。



善教寺護持会総会写真（平成25年2月11日開催）